

2022 年 1 月 24 日

学校法人 近畿大学
理事長 世耕 弘成 殿

近畿大学教職員組合
執行委員長 阪本 洋三

団体交渉要求書

近畿大学教職員組合（以下、本組合）は、学校法人近畿大学（以下、貴法人）に対し、改めて新型コロナウイルス感染症対策の徹底を求める。

この 1 週間、複数の学生から本組合に対し、感染対策に関する意見・感想が寄せられている。それらはいずれも貴法人が適切な対策を講じていないことを疑問視するものである。本組合は貴法人に対して再三にわたって適切な対策を講じるよう要求してきたが、マスクの着用一つをとっても適切な対策が講じられていない。本学における感染対策に関して何ら権限を有しない本組合ができるのは要求書を出し続けることくらいであるが、学生からの声が続々と本組合に届くという現状の異常性をまずは認識していただきたい。

1. 学生から、「府や国からの判断を待たないと何も出来ないと言い訳を聞かされても、この 2 年で学生が満足できるような対応を未だに練れていない、行えていない貴学の裁量に疑問が残ります」とか、「ステージ 1 であると診断書を認めないと言い張るので、よくよく考えるとこのような過去最多の状況でステージ 1 にしているのがおかしい」という意見が寄せられている。

本組合も繰り返し述べているが、対面にするかオンラインにするかは、まん延防止等重点措置や緊急事態宣言が出されているかではなく、感染者数等の客観的な数値に基づいて決めるべきである。1 月 22 日についていえば、大阪府内だけで 7000 人を超える新規感染者が出ているが、本学の基準はステージ 1 である。これをおかしいと思わないのであれば、そのこと自体が問題である。感染に対する不安を抱えたまま学業などできるわけがない。対面やオンラインの基準の抜本的な見直しを要求する。

学生のごことは義務的団交事項ではないと回答していただくことも予想されるが、これは教員の労働条件に関することでもある。感染に対する不安を抱えた状態で適切な授業ができないのは明白である。もちろん、科目の特性を考慮して対面での授業を希望する教員がいることは本組合も承知している。本組合も一律にオンラインの強制を求めることは一切しない。求めるのは、感染に不安を覚える教員に対面授業や対面試験を強制するなということである。

2. 学生から、次のような報告が寄せられている。「対面に切り替わってから教室の状況

(席や生徒数など)は現在まで変化はありません。つまり、3密を回避するという行動(感染対策)がこれまで一切行われなかった証拠です」「教室では、CO2メーターの警告音が鳴り、危険とされてるにもかかわらず、すし詰めでの講義が行われています」「経営学部ではオンラインでの試験実施を要望しても対面実施の一点張り。他学部ではオンライン試験等に即時に変更したのに経営学部ではできていません。その対面試験では一つの教室に200人以上を入れ込み、人から1mの範囲内に6人いるという密のなかでも酷い状況です」。

以上の報告は、貴法人の感染対策が口だけであることを物語るものといえる。学生からは「経営学部の上層部は学生の命よりも対面の方が大事なのでしょうか?」という声も寄せられているが、法的な責任を問われないようにという観点からの対策に終始しているから口だけの対策となり、結果としてこのような声が寄せられるのであろう。学生や教員が不安を覚えないような感染対策を講じ、それが実現される状況を担保せよ。

3. 学生から、「ごく一部ですが、追試験を受験したくないがために体調不良でも無理やり受験しようとしている生徒も居るようです」とか、「体調を崩しているのですが、対面試験と言われているので全力で受けにいくつもりです。咳や熱はありますが、必修の単位の方が重要ですし、校門の体温計は都合のいいことに23度くらいとしか表示されませんので、コロナかわからないけれども対面試験を受けに行くつもりです。まあ試験さえ終われば感染拡大しようとうちは関係ないですもんね」という声が寄せられている。貴法人が早急に定期試験をオンラインに切り替えなかった必然的な結果といえる。これらの学生がもし感染者であるのなら、同じ教室で受験する学生・教員も感染のリスクに晒される。この状況を是認するのか、是認しないのであればどのように対応するつもりなのか回答せよ。
4. 学生から、「消しカスの残る机(おそらく未消毒なのでは)に空の消毒液ボトルの設置、80人近い学生を大講義室でない教室で試験を受けさせたり、大学前が人で溢れている現状のどこが感染対策が徹底されていると言えるのでしょうか。感染しても比較的症状が軽いために一般入試を予定通り実施する為にこのまま対面での試験を断行するのでしょうか。全くもって不思議でなりません」という意見が寄せられている。貴法人が入試を重視していることは理解できるし、本組合もその点について異論はないが、かといって在學生を犠牲にすることは許されない。学生からも「入試を滞りなく実施するために、在學生の生命・健康を後回しにしているのか」という趣旨の意見が寄せられるというのは深刻な事態である。これから入学してくる未来の学生、あるいは入学はしないまでも近畿大学を志す受験生のための安心・安全な入試の実施が重要であることは言うまでもないが、すでに入学している在學生に対しても十分な配慮をすべきである。そもそも、前期A日程入試の前後に行われる定期試験において、可能な限りの感染対策をすることこそ、安心・安全な入試の実施に資するのではないか。そのような認識をもって感染対策を徹底せよ。
5. 学士力強化検討委員会の指示のもと、各学部では2022年度の授業形態について検討

を行ったが、これは2022年4月の段階でアフターコロナの段階に入っていることを前提としたもので、感染対策という観点からのものではない。第6波自体はこれまでと同様にそのうち収束していくものと思われるが、2022年4月の段階でアフターコロナの段階に入っていないであろうことは誰の目にも明らかである。アフターコロナを前提としたプランをアフターコロナの状態になっていない段階で強行しないよう求める。不安を覚える学生への配慮も継続するよう求める。

即時の回答を求める。

以上